

NPO 法人

第63号

芦安ファンクラブ通信

南アルプス地域の自然を愛するすべての人達に対して、地域の人々との交流を通じた南アルプスの環境保全及び適正利用に関する事業を行い、もって、南アルプス市芦安地域の活性化に寄与する。

～芦安ファンクラブの理念～

特定非営利活動法人芦安ファンクラブ 事務局 南アルプス市芦安芦倉 1578

TEL 055-288-2345 FAX 055-288-2531 HP <http://ashiyasu.com> Mail afc3193@nus.ne.jp

2016 シーズンの営業を終えて

長衛小屋 井上佳之

2016年の夏季営業も無事終わりました。6月の入山時には、例年より雪が少なく水不足の心配もありましたが、8月の台風や9月の長雨で水場が涸れることもなく、混雑時を乗り切ることができました。

天候不順の影響もあり、9月や10月の連休までは登山者が少なかったのですが、中旬以降に登山者が増え始めました。

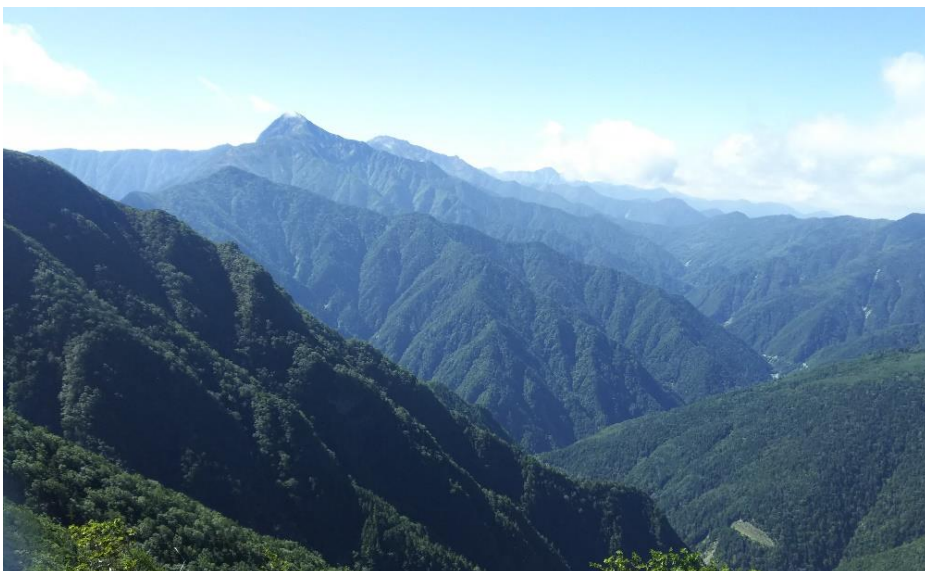
例年ですと、体育の日の後はお客さんが減ってくるのですが、天然水のCM効果でしょうか？11月に入ってもにぎわいが続き、小屋締め作業がなかなか出来ないほどでした。栗沢山の問い合わせも多く、その際には、2,700mを超える山であることや、10月後半には氷点下になること、それに雪が降ることもあると伝えていましたが・・・。

CMの撮影が8月だったということもあり、軽装での登山でしたので、10月後半になってもそれに近い装備の登山者が多く見受けられ、少し心配になりました。

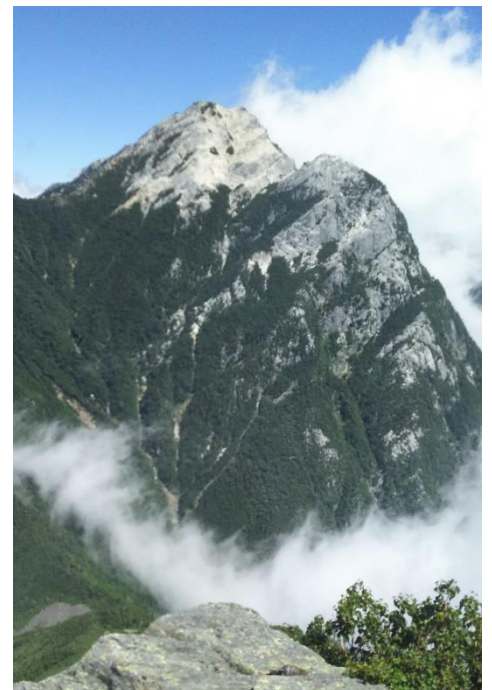
インドア派のタレントさんが登ったとは言え、その時は何人ものガイドが付きましてし、季節も大分違うので、その辺りを考えてもう少し注意していただけらなあと思いました。

とは言え、栗沢山も魅力的な山なので、登山者が増えるのはとても良いことだと思いました。

そういえば、栗沢山の山頂でCMの真似をして叫んでいる人も多くいたそうです。『ありがとー！』



栗沢山頂上から北岳を望む



甲斐駒ヶ岳の雄姿

第42回登山教室

開山200年 秋の甲斐駒ヶ岳

芦安ファンクラブ 中島紫穂

1 日目、芦安山岳館に集合してそれぞれ自己紹介。乗合タクシーとマイクロバスを乗り継ぎ長衛小屋まで移動です。次の日の天気予報があまり良くないとの予報が出ていて、バスの中でも天気の話で持ちきりに。北沢峠が近付くと、青い空に仙丈ヶ岳と甲斐駒ヶ岳の山体が見え隠れ。明日もこの姿を見せて欲しいと切に思いながら長衛小屋に到着しました。

長衛小屋では甲斐駒ヶ岳の山岳地形と歴史についての座学。講師の大滝さんと石川さんの話に皆さん興味津々に聞き入っていただきました。その後に苔の生態について苔の観察会に参加したメンバーで少しレクチャーをしました。明日は美しい苔の森を歩き、男前の甲斐駒ヶ岳の頂きへ！期待を込めて美味しいご飯をしっかりといただき、少々の楽しいお酒でエネルギーを蓄えて眠りにつきました。

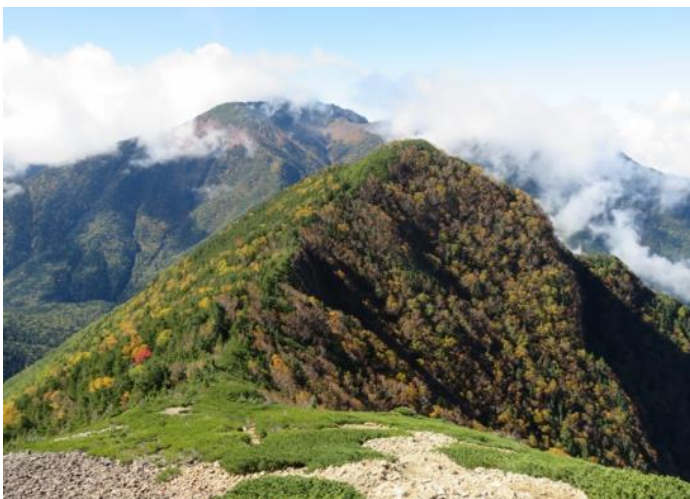
2 日目、夜明け前からあいにくの雨。登山道の途中で食べる予定だったお弁当を小屋で食べ、5時に出発。石川ガイドと中島ガイドに分かれ 2 班体制で歩き始めました。途中で雨が強くなる中、ヘッドランプを点灯して薄暗い樹林帯を黙々と歩いていると綺麗な苔の絨毯が現れ少し元気に。わかる限りの苔の名前をお話しているうちに周囲が明るくなり、仙水峠に到着。雨は止みませんでした。少し風が吹いてきたので、そろそろお日様が出るかも知れないと期待して駒津峰を目指しました。皆さん駒津峰までの急登に息を切らし、ふと見上げると青空が！！

明るい太陽に元気をもらい駒津峰で記念撮影。いよいよ甲斐駒ヶ岳が近付いて来ました。岩場も慎重に上り下り、慌てず焦らず一步一步。真っ白なキラキラと輝くマサの中を登ると眼下に摩利支天、そして甲斐駒ヶ岳の山頂に到着！！皆さんやった〜と大歓声！記念撮影とお昼ご飯を食べて、しばし山頂からの景色を堪能しました。快晴というほど天気は晴れませんでした。流れる雲の間から周囲の山々が見え隠れする景色を皆さん楽しんでいました。下りも慎重に、怪我もなく、双子山経由で北沢峠へ無事に下山出来ました。

「一人では無理だと思い、今回登山教室に参加して甲斐駒ヶ岳を初めて登る事が出来ました、ありがとうございました。」と言って下さった参加者の方もいて芦安ファンクラブ登山教室の使命は大きいと感じました。これからも皆さんが楽しんで、チャレンジする気持ちになれる様な登山教室を企画して行きたいと思えます。



頂上目指して登ります



秋深まる登山道



頂上で皆さんと

山梨百名山標柱設置に参加して

芦安ファンクラブ 入倉利也

山梨県には、101本の標柱が山梨百名山の山頂に設置されています。そのうち73本は老朽化が進んでいるため、新たな標柱の交換や設置作業のボランティア募集がありました。

NPO法人芦安ファンクラブでは、地元南アルプス「北岳」の山梨百名山標柱設置ボランティアに応募しました。平成28年9月24日～25日芦安ファンクラブの会員5名が参加して新しい標柱の運搬、設置を行いました。当日は天気に恵まれ北岳山頂からは南アルプスの山々が一望できる中、大勢の登山客に見守られ、無事設置し、御神酒と塩で清め安全祈願をして作業を終了しました。

設置後、多くの登山客が標柱前で記念写真を撮り、「良い記念になった」「良い思い出になった」と言って頂き、嬉しく喜びが湧いてきました。この標柱がこれから北岳を登山する人々の思い出作りに貢献できれば良いと願っています。



背負って運びます



作業中



無事に設置完了です

9/11 苔観察会に参加して～前号の追記です～

八王子市 中村正吾

最初に苔教室開催の情報を頂いた時、これは参加しなければと反射的に思いました。それはこれまで何度も参加した地衣の観察会において、苔は常に「地衣でないもの」に留まり長年気になっていたからでした。

今回も歩くことが出来た南アルプスを代表するような美しい森林の風景には、瑞々しい緑が欠かせません。そしてその緑の風景を構成している主要なスタッフとして、一面に広がっている小さな苔たちの存在がいかに重要であるかが、今回あらためて良く分かったのです。それもよく見てみれば、大きさも形状も異なる何種類もの苔たちが、いろいろな姿を見せてくれていました。まさに「苔の宇宙」と言っても良いと思います。もし、山々に苔が無かったら、山はどれほど味気ない世界であることか…そんなことを思いました。

後日に講師の大石先生の御本を購入して拝読しつつありますが、苔の楽しさが凝縮されたような御本で、大石先生に教わる事が出来たことが大変に恵まれていることを再認識出来ました。今後もあせらずゆっくりと苔の世界を楽しんでいこうと思います。

八王子市 中村ますみ

「南アルプスでの苔の観察会」なんて、滅多にない、稀少な機会…という訳で、夫と共に参加した観察会は、これまでの苔の認識を改めさせてくれるものでした。自然界の輪廻転生のプログラムの中で、とても重要な役目を担っている苔を『健気な生物』と表現し、時に擬人化し、苔への情熱に溢れた大石先生の解説は実に面白く、観察会はあっという間の楽しい時間でした。

足下に広がるマクロの世界の新しい楽しみ方を教わった気がします。どうもありがとうございました。

【連載】私と「山」と④

芦安ファンクラブ 井口 功

今回は、山梨県山岳連盟で2回目の海外登山に参加した話をしたいと思います。

平成7年になり、登山対象の山が「ディラン峰・7257m」に決まったので、参加しないか？と岳連から連絡を頂き、私も次は7000mの山に行きたいと思っていたので、すぐに「参加する」と答え計画に加えてもらいました。

ディラン峰を新ルートで登ろうとなり、南面のヒナルチェ氷河の様子を見ようと、平成7年8月19日～9月3日に7名の方々と偵察山行に出かけました。ベースキャンプをどこにするか、隊員や物資の移動はどうするか、上部へのルートはどうするかなどの調査を実施し、参加者を山梨の岳人たちに募りました。

最終的に13名で、平成8年7月4日に山梨を出発、翌5日、成田から北京経由でイスラマバードに着きパキスタンでの行動が始まりました。カラコルムハイウェイ（ハイウェイとは名ばかりのガタガタ道）をひた走り10日の夕方にギルギットに着きました。そこで2日程ポーターの手配等の準備をして過ごしました。

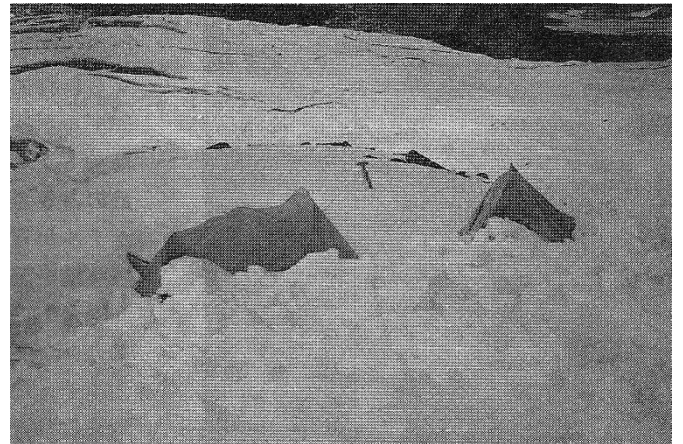
7月13日、雨の中を5時間かけてベースキャンプとなるヒナルチェ（3450m）に着きました。午後また土砂降りになり、パキスタンでは50年振りの悪天候とのことで、先行きに大きな不安を感じました。そこには、日本のバーバリアン隊とスペイン隊との2隊が先着していて、すでに登山活動に入っていました。



南面のディラン

7月14日からいよいよディラン峰への登山が始まりました。先行していた日本とスペインの2隊とは、別のルートを見つけようと思いましたが、C1（キャンプ1）までは同じモレーンに沿ったルートとなりました。

C1テントを設置したところで、また天候が悪くなり全員で急いでBCに下りました。翌日も悪天候で全員BCにて沈殿（そこに留まり動かないこと）。翌日、天気が回復したのでC1に登ると、3隊のキャンプは雪崩に埋まっていた。改めてC1地点を探し、氷河のど真ん中の平坦な地点に移動したのですが、そこも大雪崩に襲われ結局C1を設けないことにしました。



雪崩につぶされた初期のC1テント

C2（約5000m）からは左上して上の氷河に達し、そこから主稜線に登るというルートに決めました。これまでに15日間を使い、残りの日数が少なくなったの攻撃になってしまいました。C2には7名の隊員がいて、隊長からアタック隊員として、中込・井口（私）・蛭田の3名が指名され、あとの4名はサポートです。残された日数が少なくアタックは1回しか出来ないのも、他の隊員の気持ちは如何ばかりかと思いやられました。しかし、アタック隊員も、7000mの山に登ろうとしているのに、高度は5500m位にしか達していない体で大丈夫だろうか、せめて、6000m位まで順応しておきたかったと思っていました。

7月29日、いよいよ上部に向けて3名でC2を出発、右左に模索しながらルートを進んでいきました。そこは硬い氷の斜面で緊張の連続でしたが、やがて、傾斜が落ち、上部が見渡せる氷河に出ることができました。西の稜線に出ると、フンザ側やBCなどが見え、遠くにナンガパルパットが眺められ大いに感激しました。

傾斜の緩んだ所にテントを張りC3としましたが、前方20m位の所に3年前のスペイン人遭難者の遺体が有り気が滅入りました。



6,000mに上がると、ドバニ、ナンガ、パルパットが見える

30日朝、中込隊員が高度障害で具合が悪く、「降りる」と言うので私と一緒に下りました。再びC3まで登り返して上部へと進みましたが、遺体のすぐ脇を登らねばならず、そのときは思わず手を合わせ、「南無阿弥陀仏」と「アーメン」を唱えて通りました。傾斜は段々と増し、クレバス帯や氷壁を越えて高度6400mの地点に、大きな岩がよきよき突き出ている所があり、その基部に狭いが平坦な所が有りビバークすることにしました。

31日、一晩中吹いていた風が止まず、寒さも厳しくガスもでていました。天候は余り良くないのですが、頂上目指して空身で登り出しました。

稜線の傾斜がきつくなり、アイゼンがチョット刺さる位の斜面をゆっくり登って行きました。私は、今朝から頭痛がして気分が悪く体が重く、苦しくて歩みが遅くなり、初めて蛭田隊員にトップを変わってもらいました。

しばらく登って6700m位の所で、強風とガス、それと私の頭痛がひどくなり蛭田隊員の調子も悪く、これ以上登るのは危険と判断しBCに登頂断念を連絡しました。

ふらふらしながらビバーク地点まで下り、デポした荷物を背負いC3を目指して下りました。途中のクレバス帯や氷壁を無事に下り、C3まで来ると体調が少し良くなってきました。BCからロープやテント等を放棄して下るよう指示されましたが、持てるだけ持って帰ろうと二人の荷物は膨らんでいました。

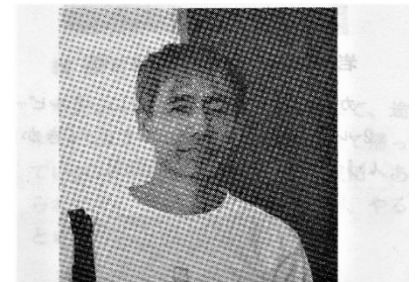


C2へのリッジをゆく

どうにかC2まで下ると、そこには中村・辻の2名の隊員が残っていて、飲み物や食事の世話をしてくれて、やっと一息入れることができました。私は一足先にBCに向け下ったのですが、最初のC1から下がセラックの大崩壊でルートが完全に消えていて、一人では危険と感じ後の3人を待って下りました。途中で日が暮れてヘッドランプを頼りにヘトヘトになってBCに帰り着きました。長い長い一日が終わりました。

登頂は出来なかったけれど高所での体験は次につながると、中込隊員とまたの約束を交わしたのでした。

その年は中込さんがカラコルムのスキルブルムに登り、私はカナダの山に登りに行ったのですが、中込さんは登頂後BCでセラックの崩落により亡くなってしまいました。私との約束を果たせないうまま逝ってしまったのです。思いの深いディラン峰登山でした。



井口 功 (50歳) 装 備

酒の種類は、まったくこだわらない酒豪・井口隊員。今回の最年長者で最高トレーニングを積んでいる、スーパーおやじです。

ディラン峰登山隊報告書より

因みに、ディラン峰は、北杜夫著「白きたおやかな峰」の舞台となった山です。

～2017年も安全登山で～

南アルプス警察署地域課長 深澤真吾

NPO 法人芦安ファンクラブをはじめとする山岳関係者の皆様には、山岳遭難救助活動等に際し、多大なる御協力を頂き、誠にありがとうございます。

昨年（11月未現在）の山岳遭難事故件数は、山梨県下全体として過去最多数となりました。当署管内でも遭難者数は過去最多の23名で、死者数は6名にも及びました。

遭難者の大半は、下山中の転倒事故によるものでしたが、実際のところ、観光感覚での登山等、事前の準備不足や登山に対する認識の甘さが原因であると強く感じたこともありました。現在も韓国籍女性が行方不明となっており、広く情報提供を呼びかけておりますが、当署では今後も尊い命が失われぬよう、また1件でも遭難事故を減らせるよう、遭難事故防止の啓発活動や救助活動に力を入れていきたいと思っております。



「安全登山 10ヶ条」

芦安ファンクラブ・編

- 1. 登山では、自分の面倒は自分で見ることが鉄則**
日頃のトレーニングや健康管理を。自分の一番弱い部分を基準にして全体のバランス向上をはかり、登る山を研究し、心身ともに十分に準備をし、自分の力で登ること。
- 2. 危険を避ける努力をする**
自分の体力・技術に合ったコースで、ゆとりある計画を立てること。登山計画書や登山届は必ず提出すること。
- 3. 完全な装備、十分な食料を持つ**
必要なものを、最小限に。必要以上持たないことも重要。
- 4. 単独での登山は危険！**
小さな失敗（足の捻挫など）だけで、重大な事故になる場合もある。助けてくれる人がいない、それが単独登山。
- 5. 安全登山のための体力の目安を知る**
「一般登山道で、1時間に標高差 300m」このペースで自分は何時間くらい登れるかを把握しておく。登りに3分の1、下りに3分の1、余力に3分の1。これが体力配分の目安。
- 6. 早立ち、早着き、無理せず引き返す**
安全登山の「大前提」。グループの場合、「他人に迷惑をかけてはいけない」という気持ちでつい無理をしてしまう。それが、少しどころか大きな事故につながる。
- 7. 気象の変化への正しい判断**
天気予報はもちろん、観天望気の知識を身につける。「せっかく来たのだから」という気持ちが正確な状況判断を妨げる。
- 8. 集中して歩く**
山はすべての場所が危険と心得よ。慎重、かつ恐れずにバランスを崩さず歩く。世間話、考え事は転倒・道迷いのもと。
- 9. 山岳保険に加入する**
どんなに注意していても、山は危険と隣り合わせ。万が一のことを考え、登山者なら山岳保険に加入するのは当たり前。
- 10. 自然を大切に**
ゴミを捨てない、ザックを植物の上に置かない、踏み荒らさない、摘み取らない。